

随 想

奈良当麻寺のぼたん

佐々木 教祐

何となくあわただしい大学生活から退職して早くも1年が過ぎました。2年以上にわたり編集に関わってきた、当財団紀要39号に紹介記事を書かせて頂いた「タンパク質の結晶化」という題名に、「回折構造生物学のために」という副題を付けた本を京都大学出版会から出版できたのは今年2005年3月末でした。50名近い研究者が執筆し、基礎から最前線の研究成果までを網羅し、結晶化のムービーなどを収めたCD-ROMも付録として付けた画期的な本ができ上がりました。創薬や医薬品の開発に携わる人に是非使ってほしい1冊です。

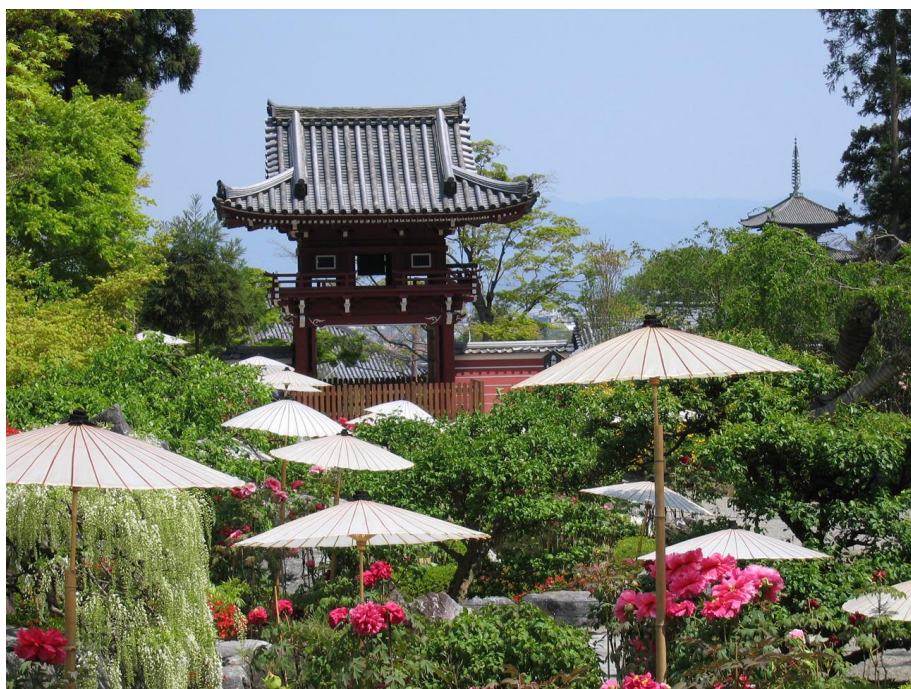
少しずつ仕事の整理ができ、時間の余裕がもてるようになり、以前から興味をもっていた古代史の遺跡が残る吉野、奈良を訪ねました。4月の始めに花見をかねて昨年世界遺産に登録されたことを記念して一般の人にはほとんど公開されたことのない金峰山寺蔵王堂の秘仏、蔵王権現立像が見られるとのことで吉野山へ行ってきました。1300年前役行者（えんのぎょうじゃ）が蔵王権現を感得され、そのお姿を桜の木に刻まれ吉野山にお堂を造ってお祀りされたと伝えられています。そのようことから桜が蔵王権現の御神木といわれるようになり、たくさんの桜木が植えられるようになったとのことです。今年の桜の開花は昨年よりも1週間ほど遅く私の行った4月6日は下千本がやっと8分咲きくらいでした。自然の丸太をそのまま使った柱が林立する蔵王堂のなかの天井にとどく大厨子には忿怒の蔵王権現像3体が祀られています。忿怒の表情をもつ3体の金剛蔵王権現様から放射される強烈なエネルギーのせい、見上げる自分の小ささを思い知らされ荘厳な気持ちになりました。

4月28日に牡丹で知られる当麻寺を訪れました。万葉の人々が二上山（にじょうさん）に沈む夕日を眺めて、その彼方に極楽浄土があると信じていたと云います。その二上山は雄岳と雌岳の二つの峰を持つ山ですが、雄岳の山頂には皇位継承をめぐる政争の中で無念の死を遂げた大津皇子の墓があります。当麻寺はその二上山の南東麓にあります。この近くを竹内（たけのうち）街道または当麻街道と呼ばれる、推古天皇21年11月に「難波より京（飛鳥京）に至るまでに大道を置く」との記事にある官道1号が通っています。大和と河内

をつなぎ、難波へと通ずるこの街道は、そこから更に海路で大陸へとつながっており、この道を通して大陸の文物がもたらされました。当麻寺は創建時の東西両塔が残っており、曼荼羅（まんだら）堂とよばれる本堂は中将姫がハスの糸で織ったと伝えられる当麻曼荼羅を本尊とし、内陣は天平時代のものです。金堂に安置される弥勒仏座像は日本最古の塑像と云われており、たくさんの人に守られ年を経た文物との出会いはやはり畏敬の念を起こさせます。

当麻寺の塔頭（たちちゅう）である中之坊、奥院、西南院、護念院などは庭に牡丹を植えており、白、ピンク、赤、黄色の沢山の種類の牡丹の花が満開に咲いていました。中之坊の庭は大和三名園の一つで、天平の東塔が借景として映え、池の水に美しい影を落としていました。西南院の庭は江戸初期の池泉回遊式庭園で、西塔が借景として取り入れられ、山裾にはシャクナゲも植えられ満開の花がきれいでした。境内いっばいに咲き乱れる牡丹の甘い香りと美しい花は、「無言の説法」だと書いてありましたが本当に納得させられるものでした。牡丹には5月の強い日差しを遮るため日傘がさしかけてありました。近鉄の当麻寺駅から寺に通ずる道端には相撲の開祖、当麻蹶速（たいまのけはや）の塚があり、駅前にある中将堂本舗で漉し餡のたっぷり入った春の香り「よもぎ餅」をいただき古代に想いを馳せる楽しい1日を過ごしました。

（名古屋大学名誉教授・国際科学振興財団研究員）



2005年春 当麻寺奥院の牡丹と東塔